

平成15年度教育課程実施状況調査 教科別分析と改善点 (小学校・国語)

1. 今回の調査結果の特色

(1) 調査結果の概要

【ペーパーテスト調査】

<話すこと・聞くこと>

新たに領域化された「話すこと・聞くこと」では、設定通過率を上回る又は同程度と考えられるものが多い。

目的や相手などの具体的な場面に応じ、立場を明らかにして自分の考えを述べる問題で設定通過率を下回った。

<書くこと>

設定通過率を上回る又は同程度と考えられるものが多いが、設定した条件に即して書くことや、自分の考えを明確にして内容を構成する問題では設定通過率を下回った。

OECD/PISA調査において、自分の考えを明確に書く熟考・評価の課題が指摘されたが、小学校では、自分の考えを付け足しながら記述する問題などで設定通過率を下回った。

<読むこと>

文学的な文章を読むことについては、登場人物の心情把握や感想に関する問題や、あらすじや内容をとらえる問題では設定通過率を上回ったが、表現の特徴を問う問題では設定通過率を下回った。

説明的な文章を読むことについては、OECD/PISA調査において、文章や資料についての解釈や、解釈を踏まえての自分の考えの構築についての課題が指摘されたが、内容がどの段落に当てはまるか選ぶ問題で設定通過率を下回ったほか、引用したり大事なことばを使って表現する問題において、自分の経験のみを記述する傾向が見られるなど、国際調査と同様の傾向。

<言語事項>

現行の学習指導要領では、漢字を書くことについて、配当学年の次の学年で定着を図るようにしており、当該学年で設定通過率を下回る問題も見られたが、配当学年の次の学年では通過率が高い。漢字を読むことは、設定通過率を上回った。

記述式の問題については、自分の意見を明確に書くことに課題がある。

【質問紙調査】

「国語を勉強すれば、私は、お互いの思いや考えをうまく伝え合うことができるようになる」と回答した生徒の割合が上昇した。

前回調査と同様に、文学的な文章を読むことや、説明や発表をすることについて、教師と児童の意識のずれがみられた。

「自分の考えや調べたことを発表すること」はあまり楽しく感じていない。

(2) ペーパーテスト調査結果の主な特色

過去同一問題についての分析

前回調査（平成13年度調査）と同一の問題の通過率を学年ごとに比較すると、前回は有意に上回る問題数が、有意に下回る問題数より多い。各学年の状況は以下のとおり。

	全 問題数	同一 問題数	前回は有意に上回 るもの	前回と有意に差が ないもの	前回は有意に下回 るもの
5年	60	19	4<21.1%>	13<68.4%>	2<10.5%>
6年	59	20	9<45.0%>	8<40.0%>	3<15.0%>
計	119	39	13<33.3%>	21<53.9%>	5<12.8%>

全ての学年で、前回は有意に上回る問題数の合計が、有意に下回る問題数より多い。特に大きく上回っている内容・領域は、13問のうち、「話すこと・聞くこと」領域（4問）や言語事項（7問）においてであった。

前回は有意に下回るものについては、自分の立場を明確にし、考えをまとめる問題が際だっている。例えば、「話すこと・聞くこと」領域の問題[6B¹三]は、前回66.9%が57.6%に、「読むこと（文学的な文章）」領域の問題[6C²三]は、前回55.8%が49.7%に低下している。文学的な文章では、表現の特色を整理したり評価する問題においても低下している。

内容・領域別に見た分析

内容・領域ごとに通過率と設定通過率を比較すると、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題数の合計が、第5学年・第6学年ともに、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと（文学的な文章）」「言語事項」において半数以上を占め、「読むこと（説明的な文章）」において半数未満となっている。各学年の内容・領域別の状況は以下のとおり。

		問題数	上回ると考え られるもの	同程度と考え られるもの	下回ると考え られるもの
5年	話すこと・聞くこと	11	4<36.4%>	6<54.5%>	1<9.1%>
	書くこと	7	1<14.3%>	6<85.7%>	0<0%>
	読むこと（文学的な文章）	4	1<25.0%>	1<25.0%>	2<50.0%>
	読むこと（説明的な文章）	6	0<0%>	0<0%>	6<100%>
	言語事項	32	8<25.0%>	20<62.5%>	4<12.5%>
	計	60	14<23.3%>	33<55.0%>	13<21.7%>
6年	話すこと・聞くこと	8	1<12.5%>	5<62.5%>	2<25.0%>
	書くこと	7	2<28.6%>	3<42.8%>	2<28.6%>
	読むこと（文学的な文章）	3	1<33.3%>	1<33.3%>	1<33.3%>
	読むこと（説明的な文章）	5	0<0%>	2<40.0%>	3<60.0%>
	言語事項	36	17<47.2%>	11<30.5%>	8<22.2%>
	計	59	21<35.6%>	22<37.3%>	16<27.1%>
合計		119	35<29.4%>	55<46.2%>	29<24.4%>

<話すこと・聞くこと>

「表現・理解」から新たに領域化された「話すこと・聞くこと」では、設定通過率を上回る又は同程度と考えられるものが多い（第5学年11問中10問、第6学年8問中6問）。ただし、目的や相手などの具体的な場面に応じ、立場を明らかにして自分の考えを述べる問題[6B¹三]が、設定通過率70%に対して57.6%と通過率が設定通過率を下回っている。

<書くこと>

「表現」から新たに領域化された「書くこと」については、設定通過率を上回る又は同程度と考えられるものが多い(第5学年8問中6問,第6学年7問中5問)。ただし、自分の意見を明確に書く記述力の問題[6B²二]において、設定通過率55%に対して通過率27.0%と下回っている。

<読むこと>

「読むこと(文学的な文章)」では、設定通過率を上回る又は同程度と考えられるものが、第5学年32問中28問,第6学年36問中28問であった。登場人物の心情把握に関する問題及びあらすじや内容をとらえる問題においては通過率が設定通過率を上回っている。一方、文学表現の工夫や特徴を問う問題[5C²三]では、設定通過率65%に対して40.9%,[6C²三]では設定通過率60%に対して通過率49.7%と下回っている。

「読むこと」(説明的な文章)については、第5学年では、すべての問題が設定通過率を下回っている。第6学年では、同程度と考えられるものが2問,下回っているものが3問である。両学年とも学習指導要領の改訂において求められた新しい指導内容の定着をみる新問題であった。例えば、経験と関係付けて自分の考えを明確にして読むこと、表現上の特色を把握したり評価したりして効果的に読むこと、目的に応じて必要な文章を読んだり調べたりすることなど[6A²四]が課題として残されている。

<言語事項>

言語事項については、設定通過率を上回る又は同程度と考えられるものが、第5学年4問中2問,第6学年3問中2問であった。

このうち、漢字を書くことについては、配当学年の次の学年で定着を図るようになっている。前学年で配当された漢字の問題(「夢」)などは通過率が高い。ちなみに、当該学年で配当された漢字の問題では、「判断」「編集」が通過率が設定通過率を下回っている。

漢字を読む問題については、第5・6学年ともに配当された当該学年で設定通過率を上回っている。

評価の観点別に見た分析

第5学年では、「国語への関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力(文学的な文章)」「言語についての知識・理解・技能」において、また、第6学年では、「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力(文学的な文章)」「言語についての知識・理解・技能」において、通過率が設定通過率を上回ると考えられるもの又は同程度と考えられるものが半数以上を占めている。

「読む能力(説明的な文章)」については、第5学年・第6学年ともに通過率が設定通過率を下回ると考えられるものが過半数を占めている。

前回調査(平成13年度)の結果で課題とされた内容に係る問題

平成13年度教育課程実施状況調査では、記述式の同一問題において、9題中4題で前回は有意に下回る状況がみられる。従って、場面に応じて自分の考えを明確にして発表したり、文章を書いたりする力を育成することが課題として残されていた。

「話すこと・聞くこと」において、話し合いの中で意見をいう問題において通過率が設定通過率を下回っている。例えば、経験から理由を入れて意見を言う問題や資料を示して意見を言う問題[6B¹三]は設定通過率70%に対して通過率57.6%である。同様に、インタビューを申し込む問題[6C¹四]も、設定通過率60%に対して通過率51.9%である。

「書くこと」領域において、自分の考えを明確にして内容を構成する問題[6B²二]のように、設定された条件に即して書くことは、設定通過率55%に対して通過率27.0%と下回っ

ている。

「読むこと（説明的な文章）」領域においては、条件を踏まえて自分の考えを述べる問題や、読んだことを踏まえて自分の考えを述べる問題〔6 A〔2〕四〕で、設定通過率を下回っている。

国際調査との比較

OECD生徒の学習到達度調査（PISA2003）で課題とされた点については、次のとおりである。

文章や資料についての解釈に課題があるという点について、「読むこと」領域（説明的な文章）において内容がどの段落に当てはまるかを選ぶ問題〔5 A〔2〕一〕を見ると、設定通過率85%に対して、(1)、(2)の問題それぞれの通過率が、74.6%、74.8%と10%下回っている。

解釈を踏まえての自分の考えの構築に課題があるという点について、「読むこと」（説明的な文章）の引用したり大事なことを組み合わせたりして表現する問題〔6 A〔2〕四〕で、自分の経験のみを記述する傾向が多くみられる。

自分の考えを明確に書く熟考・評価に課題があるという点について、「書くこと」領域の自分の考えを付け足しながら記述する問題〔6 B〔2〕二〕で、設定通過率55%に対して27.0%と通過率が設定通過率を下回っている。

文章や資料の表現方法についての熟考・評価に課題があるという点について、「文学的な文章」の表現の特色を説明した文の中からふさわしくないものを選ぶ問題〔5 C〔2〕三〕では、設定通過率65%に対して40.9%と通過率が設定通過率を下回っている。「説明的な文章」の筆者の表現の工夫をとらえる問題〔5 A〔2〕二〕は、設定通過率65%に対して50.7%と通過率が設定通過率を下回っている。

（3）質問紙調査の結果の概要

児童質問紙調査

国語の勉強が好きだと答えている児童は、第5・6学年ともに5割以上を占めた。

児童が嫌いだと感じている割合が比較的高い学習活動は、「感想文を書くこと」「説明や発表をすること」「記録や報告などの文章を書くこと」「いくつかの文章を読み比べること」「文学的な文章を読むこと」「話や本の内容をメモすること」「読んだ後に関連した他の文章を読むこと」「説明的な文章を読むこと」などである。これらは、読むことの領域に関するものが多いことや表現様式が明確で、従って条件が厳しくなる活動に対するものが多いことが分かる。

教師質問紙調査

学習指導要領に示された言語活動例は、約6割以上の教師が授業に取り入れている。

チーム・ティーチングや少人数指導などの学習形態の工夫の取組は、1割にもならず、ほとんど進んでいないことが分かる。また、発展的課題を取り入れた授業も、「行っている方だ」「どちらかといえば行っている方だ」を合計しても4割に満たない。

児童質問紙調査と教師質問紙調査との比較

教師は児童が興味を持ちやすいと思っているが、児童が嫌いだと感じるといった意識のずれがみられる学習活動は、「文学的な文章を読むこと」「説明や発表をすること」「読んだ後に関連した他の文章を読むこと」などである。

教師が理解しにくいと思っているが、児童は分かりやすいと思っているといった意識のずれがみられる学習活動は、「言葉のきまりを身に付けること」「相手に伝えるために分かりやすいように工夫しながら話したり書いたりすること」「いくつかの文章を読み比べること」「言葉を理解してたくさん覚えること」などである。教師は、児童が言語事項や説明文などについては理解しにくかったり、興味を持ちにくいと考えているが、実際には必ずしもそのようになっていない。特に、言語事項は、むしろよく分かるし、好きだったという傾向が強いので、教師の把握とは違っていることが分かる。

2. 今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点

(1) 自分の立場や考えを明確にする言語活動の充実

自分の立場や考えを明確かつ直接的に話したり書いたりすることや、筆者が示した話題や考えに応じながら自分の考えを明確にして読んだりすることに課題がある。例えば、「自分の意見を次のげんこう用紙に百字ぐらいでまとめましょう [6 B 1三]」、「『自分の考え』を付けたしながら、百二十字ぐらいで書きましょう [6 B 2二]」、「あなたの考えを、あなた自身の読書の体験もあげながら百字ぐらいで書きましょう」などの設問にみられる。

普段から筆者の問題提起や主張、文章や資料にあらわれているものの見方や考え方に応じて、自分の立場や考え・意見を明確にしながらか、聞いたり読んだりする言語活動を多く経験させるようにする必要がある。また、意見や考えを深めたり高めたりするために、自分の生活経験や知識と結び付けたり、他の人の立場や考えとの違いを意識したりして、自分の考えをまとめる言語活動を日常的に行うようにする必要がある。

(2) 目的や相手に応じた言語活動の充実

目的や相手、表現様式や場面に具体的にに応じることに課題がある。例えば、依頼文や意見文、報告文など、実際に取り上げられる表現様式の特性に応じて、学習計画を立てたり、取材や構成メモを活用したり、実際に必要な発表原稿や文章を書いたりすることが十分ではない。また、目的や相手に応じて選書したり読んだりした上で、感想文や読書発表などの原稿を書いたりするなど、読書の一連の活動で必要とされる能力に不十分さが認められる。例えば、「ひろしさんは、インタビューを申しこむことにしました [6 C 1四]」、「お願いの手紙を書く」、「読書発表会を行います。あなたは、発表会でどんなことを伝えますか [6 C 2三]」などの設問にみられる。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域は、現実の生活場面では、多様な目的や相手に応じて表現様式が決められる。従って、児童は、それらの表現様式に応じて言語活動を行う必要があり、学習ではできる限りこのような現実的な場面に即した目的や相手を設定した言語活動の場を工夫することや、活用する表現様式の一連の活動に応じて具体化する能力を育成する言語活動を行う必要がある。

(3) 決められた条件に応じた言語活動の充実

経験と関係付ける、課題の文章の何に基づいているかといったことへの言及や引用、メモや資料の活用、字数や解答時間などの制限など、決められた条件に応じる言語活動に課題がある。例えば、「経験したことなどから理由をあげて、話し合いに参加するつもりで、自分の意見を次のげんこう用紙に百字ぐらいで書きましょう」、「資料1と資料2のどちらか、または両方を使って、話し合いに参加するつもりで、自分の意見を次のげんこう用紙に百字ぐらいでまとめましょう [6 B 1三]」、「文章中の言葉を引用したり、大事な言葉を組み合わせたりしながら、次のげんこう用紙に百字ぐらいで書きましょう [6 A 2四]」などの設問にみられる。

自由に考えを巡らすことに加え、厳しい制限や決められた条件を提示し、様々に応じる言語活動を数多く経験させるようにする必要がある。多様な文章や資料を取り上げたり、

課題や題材も広げて実際に短時間で簡潔に話したり書いたりするなど、条件に応じる力を高めるようにする必要がある。制限や条件に応じた優れたモデルを示したり、発表原稿や下書きなどを条件に合わせて推敲したり評価したりする活動を学習過程に繰り返し位置付け、意識化を図ったり完成度を高めるように工夫したりする必要がある。

(4) 表現の方法や工夫を評価する言語活動の充実

各種の表現様式の特徴を理解し、その表現上の特色を把握したり評価したりすることや、話し手や筆者が目的や相手に応じて実際の場面に即して行った表現の工夫について自分の考えをまとめたり評価したりしながら読むことに課題がある。例えば、「本文中の点線で囲んだ部分は、特色のある表現となっています [5 C 2 三]」、「この物語の内容や表現の特徴にふれながら、読書発表会を行います」、「この文章では、読書のよさを分かりやすく伝えるために、第6段落で書き方を特に工夫しています [5 A 2 二]」などの設問に見られる。

各種の表現様式の特徴について、必要な知識を実例を通して理解させなければならない。目的や相手や場面に応じて、実際の表現の工夫を見つけたり、その妥当性を検討したりするなど、評価しながら読む活動を行わなければならない。また自分でも効果を考えて工夫しながら話したり書いたりする言語活動を行う必要がある。

(5) 多読や比べ読みなどの多様な読書活動の充実

目的に応じて必要な文章を読んだり調べたりすることや、様々なジャンルの文章を読み、その特性に気付いたり実感したりすることに課題がある。また、質問紙調査からは、文学的文章を読むことが嫌いだという割合が高い、多読や比べ読みなどの言語経験が少ないなどの課題がある。例えば、「この物語では、文章の中ごろで、それまでとはちがって、不思議な別の世界に入っていきます」、「どの段落の内容に当てはまるでしょうか [5 A 2 一]」、「図書室で見つけた次の本の中で、調べるのにふさわしいと考えられる題名のついた本を二冊選んで」などの設問にみられる。

情報活用や楽しみ読みなど自分の主体的な立場を明確にした目的を設定することや、必要な図書資料を選んだり、それらに応じた多読や比べ読み、速読や摘読、目標や時間を具体的に決めるなど、多様な読書活動を積極的に教育課程に位置付けたり、学校図書館や公共図書館を利用する読書環境作りを行ったりする必要がある。

(6) 漢字や語彙を豊かにする言語活動の充実

漢字又は語彙、ことわざなどにおいて、日常生活の中での親近度が低いために十分習得していないものがあるという課題がある。「逆上がり」、「良薬口に苦し [6 B 3 三 (3)]」などの設問にみられる。

児童の生活や言語活動の実態を定期的に調査し、書いたり読んだりする活動などにおいて意図的に習得させるべき漢字や語句を取り出して指導したり、小单元などを年間指導計画に位置付けて教材開発することで意識化させたりする必要がある。日常の読書活動での選書においても、幅広い文章や資料に出会わせるようにし、新しい漢字や語彙を繰り返し目にするようにする必要がある。

(7) 国語への関心・意欲・態度を高める言語活動の充実

積極的に発表するなどの意志表明や、読むことにおいて分かりにくかったり、嫌いと感じていたりするなどの国語への関心・意欲・態度に課題がある。無解答率が10%を超える問題は、記述式の問題が第5学年で3問、第6学年で3問の計6問、求答式の漢字問題が第5学年で4問、第6学年で1問の計5問である。記述して自分の考えを明確に書き込むといったことに対する意欲に課題があることが分かる。質問紙調査から、児童が嫌いだと思っている学習活動は、「説明や発表をすること」「話や本の内容をメモすること」「記録や報告などの文章を書くこと」「文学的な文章を読むこと」「感想文を書くこと」「いくつかの文章を読み比べること」など多岐に渡っている。比較的分かりにくいと思っている学習活動は、「文学的な文章を読むこと」「いくつかの文章を読み比べること」「読んだ後に関連した他の文章を読むこと」など「読むこと」の領域に集中している。特に「説明や発表をすること」「文学的な文章を読むこと」については児童が嫌いだと思っているが、教師は児童が興味を持ちやすいと思っているという意識のずれがみられる。

相手の立場や考えを尊重しながら、自分の考えや意見を表明したり伝え合ったりする大切さを理解させたい。また、読むこと領域における言語活動に課題が多いことに着目すると、各種のジャンルの本を読んだり、単元内で積極的に多読することを並行するなどの工夫をし、児童の実態に即して興味を喚起し、読むことへの関心・意欲・態度を高めるようにする必要がある。